ぎふの教育
岐阜県教育懇話会
〒503-0023
大垣市笠木町229-5
(0584)91-2478
口座番号 00800-3-5390

綱領

一、われわれは歴史と伝統を尊重し、日本にふさわしい中正な教育を推進する
一、われわれは教養と品位の向上につとめ、真理愛の精神とともに、明るく純粋な教育を研修する。
一、われわれは個人の自主尊厳を尊重しつつ、政治的中立を厳守し、主体性を堅持する。

日本教師会
第61回教育研究大会
今夏 岐阜市で開催

編集部

本年八月、日本教師会教育研究大会を本会が主管して行う。岐阜市での開催は令和元年に続き八回目となる。今回は若井勲夫会長から渡邉毅会長に替わる節目の大会となることもあり、新機軸を打ち出すべく主管県としても努力をしていきたい。

日程と研究主題、趣旨等は次のとおりである。

期日　八月五日（土）午前十時～午後四時半
　　六日（日）午前九時～午後三時
場所　岐阜市生涯学習センター
　　ハートフルスクエアG
　　中研修室(予定)

※初日は次の研究主題のもとに研究協議と総会を行い、二日目は終日大垣・関ヶ原方面の巡検を予定。

研究主題
「今教師に求められる資質能力
　―研修の工夫と実践―」

主題設定の趣旨

教師の研修は教育公務員特例法によって義務づけられており、任命権者である教育委員会は研修の場を用意せねばならない。それが本年四月より従来の免許更新講習に代わって研修履歴による面談を通した研修となった。年二回の管理職との面談による評価の時に合わせて行い、必要に応じて大学等での講義を受けることなどの助言をされるという。

従来から教師の研修は、①校内研修（校内研究など）②校外研修（教務主任等の職務研修や内地派遣など）③自主研修（民間サークルや組合の研修会）があり、今後もその体制は変わることはない。そしてそれらの成否は教師の姿勢次第であることも変わらない。

教師は児童生徒を日本人として立派に成長させるため、彼らの人格、資質・能力を伸ばす重大な役目を負っている。児童生徒は教師の仕組む授業や諸活動での意図的な指導を通して学ぶのだが、同時に教師の人格に触れて心を動かすという意図しない影響も受ける。教師の自覚と努力が問われる所以である。

日本教師会ではその重大性を鑑みて、教研大会で「これからの日本人教育と教師のあり方をどのように求めていくか」（昭和43年出雲）、「望ましい教師像と教員養成―教師の自己改革を目指して」（昭和62年名古屋）を取り上げ、青年部でも「望ましい教師像を求めて」（昭和56年名古屋）をテーマに研究し研修をしてきた。そして会員は「教師の使命を自覚し、日本にふさわしい教育を推進する」（「日本教師会綱領」昭和40年）ことを期して実践を続けてきたのである。

今日、学校教育は不登校、特別支援対象の児童生徒の増加に加え、ITCの導入などの新しい教育方法の導入が求められている。課題が山積するなか、解決に向けて適切に対応しなくてはならない。そのために今教師に求められる資質能力は何か、それをどう身につけたらよいか検討をしていきたい。

一日目「研究協議・総会」

〈記念講演〉
演題「教師の使命と
　　これからの教師会」
講師　皇學館大学教授　渡邉　毅

〈実践発表〉
1「Web研修の効果と課題」仮題
　大阪浪速中高校教諭　松尾大輔
2「子どもの志を育む教育」
　世田谷区立多聞小学校教諭　伊藤　優
3「吉田松陰先生に学ぶ教師道」仮題
　岐阜県教育懇話会幹事　坂口浩之

〈総会〉
令和四年度事業・会計決算報告
令和五年度事業計画・予算案等

二日目「大垣・関ヶ原史跡巡検」

以前の教研大会では、その地域の史跡等の巡検が行われていた。大会の規模が縮小され主管県の負担も考えて行われなくなっていた。今回は研究会・総会を一日で行うため、各地から来ていただいた会員に普段訪れることの少ない史跡を案内しようということになった。

大河ドラマの主人公が徳川家康でもあり、関ヶ原を中心に、西軍の立てこもった大垣城など、大きな時代の転換点となった舞台に立ってもらい、今我々自身も大きな時代の変わり目にいることに思いをはせ、今後の各地での健闘を誓い合いたい。H

時論

徳川家康の「遺訓」を見直す

京都産業大学名誉教授　所　功

一　学問を好んだ家康

戦国時代のいわゆる三英傑のうち、信長は偉いし、秀吉は面白い。しかし私が一番好きなのは、徳川家康である。なぜかというと、家康は武に優れているだけでなく、文にも秀でていたからである。

家康は六歳から十九歳まで人質として今川義元に預けられていたが、かなり優遇され、学問に励んでいる。勉強が好きになり、やがて京都に上がると、そこでいろいろな学者に会って話を聞いたり、家来にいろいろ調べさせ、『吾妻鏡』とか『源氏物語』などを幅広く集めた。

特に散逸していた金沢文庫本を買い求めている。その多くは家康が第九子の義直に譲ったから、今も名古屋の蓬左文庫で見ることができる。

徳川家康像（大阪城天守閣蔵）

このように自身も勉強をするが、重要な史資料を集めて後世に伝える努力をしてくれた。そのお陰で、私どもはいろいろな研究が出来る。そういう意味で私は、家康の文徳に感謝している。

私は父が早く戦死したので、母に育てられたが、小さい時にその母から「人の一生は重荷を背負うて行くが如し、急ぐべからず」とか「不自由を常と思えば不足なし」というような事を聞いた。それは多分、家が貧しくても、そんなことを気にしないで我慢しながら、気長に頑張れ、という励ましだと受け止めてきた。

二　家康の子だくさん

この機会に家康の家族を調べてみると、父親は松平広忠、母親は水野忠政の娘でお大という。その間に生まれた家康は、三河では小さな領主であったが、だんだんと勢力を広げていく間にいろいろな武将と関わって成長する。その際に大事な存在は奥方であった。大河ドラマでも、家康の正室瀬名（生母は今川義元の近親）が、好意的に描かれている。

家康は若いころから、どうするか困ると身近な人々に助けてもらった。その最たる者が、非常にしっかりした瀬名で、家康を叱咤激励している。

この二人の間に生まれた信康は、織田信長の娘五徳と結婚する。ところが、信康は信長と仲違いをしてしまう。その原因は妻の五徳が信長に告げ口をしたためと言われており、自害させられた時に、瀬名も殺されている。この正室瀬名（40）と長男信康（21）を失ったことは、家康（37）の大きな転機になったものと思われる。

その後、継室として旭日を迎える。秀吉の妹で、早く結婚していたが、無理矢理に離婚させられて家康のところへ入っている。

家康にはそれ以外にたくさんの側室がいる。その間に生まれたのが、秀康・秀忠・忠吉などである。秀康は松平として越前の藩主になり、次の秀忠は二代将軍となる。その秀忠と結婚したお江（ごう）は、浅井長政の娘で、淀君の妹である。

この秀忠とお江との間に、家光・忠長・和子（まさこ）が生まれた。秀忠とお江の存在は、その後の幕政にも、朝廷との関係にも大きな意味をもっている。

家康は精力絶倫で、関ヶ原合戦後の六十歳代にも優秀な子供をもうけた。その第九子は義直、第十子は頼宣、第十一子が頼房である。この三人が徳川御三家と言われる尾張・紀伊・水戸の藩主となっている。

家康の人生は決して平坦ではなく、むしろ苦難の連続であった。だから当然悔やむこともあれば、投げ出したいようなこともある中で、奥方や家臣の励ましを受けながら乗り越え、数え七十五歳で大往生をとげている。

三　家康の確実な遺言

家康は亡くなる直前に遺言を残した。それは金地院崇伝という家康のブレーンであった禅僧の『本光国師日記』元和二年（一六一六）四月四日条に次のごとく記されている。

「臨終候はば、御体をば久能（山）へ納め、御葬礼をば増上寺にて申しつけ、御位牌をば三河の大樹寺に立て、一周忌も過ぎて以後、日光山に小さき堂を建て勧請し候へ。」

これに従って、四月十七日に家康が亡くなると、まず遺体を駿府の久能山に埋めた。それが一年後、日光の東照宮に改葬されている。

この久能山と日光の関係を見ると、久能山の東北に富士山があり、その先には江戸城がある。また江戸城の真北に日光山がある。

つまり家康は亡くなってからも、南の久能山と北の東照宮より江戸を見守り続けようとしていた、ということになろう。

ただ個人的には浄土宗の信者であったから、江戸の増上寺で葬儀を行い、位牌を岡崎の大樹寺へ納めるように遺言したのである。

四　水戸光圀作「人のいましめ」

家康には、この遺言よりも有名な「遺訓」といわれるものが伝わっている。その全文は次の通りである。

「人の一生は重荷を負うて遠き道をゆくが如し。いそぐべからず。不自由を常とおもへば不足なし。こころに望おこらば困窮したる時を思ひ出すべし。

堪忍は無事長久の基、怒りは敵と思へ。勝つ事ばかり知て負くる事を知らざれば、害其の身にいたる。おのれを責めて人をせむるな。及ばざるは過ぎたるよりまされり。」

これは、明治以降、久能山東照宮でも日光東照宮などでも家康の自筆と称するものを掲げており、一般にも広まっている。しかし、これは当時のものではなく、別人の教訓が転用されたものとみられている。

それを的確に指摘したのは、尾張徳川家二十一代徳川義宣氏の論考「徳川家康遺訓「人の一生は」について」（『金鯱叢書』九、昭和57年）である。

これによれば、天保元年（一八三〇）尾張藩儒の深田香実編『天保会記』に**「人のいましめ　水戸黄門公御作之由」**として引載される文言は、一般流布の家康遺訓と大半合致する。

しかも、これより現行の遺訓に近い文言が、同十五年（一八四四）、江戸の書画家松本薫斎の書写幅に「神君御遺訓」と題されている。

従って、祖父家康を尊崇する光圀の作と伝えられる「人のいましめ」が、天保年間に「神君」の遺訓と称し流布していったと考えてよいであろう。

なお、茨城県立図書館など所蔵の『徳川光圀九ヶ条禁書』には、「苦は楽の種、楽は苦の種・・・分別は堪忍にありと知るべし」とあり、『人のいましめ』と通底している。

五　井上正就の「覚書」

この遺訓とは別に「東照宮御遺訓」とも称される『井上主計頭覚書』が愛知県立図書館などに存在する。

これは家康の側近であった井上正就（一五七七～一六二八）が、元和の初め秀忠の命により駿府へ赴き、家康から聞いた話を書きとめたものといわれる。

ただ、ややこしいことに、その内容が途中でかなり変わっている。その原本は仏教色が強いのに対して、貝原益軒（一六三〇～一七一四）が儒教風に書き換えたとみられる。

たとえば「日本の大宝を三種の神器と云ふ。神璽は正直、宝剣は慈悲、神鏡は智恵、この慈悲と智恵と正直を三種文字と云ふ。阿弥陀の三尊と云ふもこの心ぞ。（儒教の）明徳・至善・親民の六文字の心も同じ事ぞ。先ず**慈悲は万の根源**と知れ。」という神仏儒の一体観が示されている。

この覚書は、竹内誠氏『江戸時代の古文書を読む』（東京堂出版、平成24年）によれば、神君の「御遺訓」として代々の将軍が家康の命日（毎月十七日）に拝読していたという。

六　嫁お江への「神君御文」

さらに注目すべきは、家康が継嗣秀忠の正室お江に宛てた長い書簡で、「神君御文」と称されている。

これを詳しく検討した論考として、豊田高専教授松浦由起氏の「名古屋市蓬左文庫蔵『神君御文』について」がある。

この「御文」を読み易くして抄出すれば、次のごとく記されている。

「一国は、一体殊の外発明（利発）なる生れ付にて、重畳の事に候。

一は竹千代＝家光、国は国松＝忠長であろう、二人とも立派に育ててくれてうれしい。

「別して御秘蔵の由、左様に有るべきの事に候。それ故、存じ寄り申し入れ候間、能々御心得、生れ立ち候べく成候、」

お江は孫育てをよくやっているが、上の秀忠よりも下の国松を大事にして何かと肩入れをすると聞くので、どの子もしっかり育てる心得をもってほしい。

「幼少の者、利発に候とて、立木のままに育て候へば、成人の節、気随我が儘ものに成り、多くは親の申す事もきかぬものにて候。親の申す事さへ聞かぬ様に成り候へば、召し仕い候者も申す事は猶以ての事に候」

子供は、利発だからと言って甘やかすと、成人してから我が儘になり、親の言うことも聞かず、仕えている者の言うことも聞かなくなりがちだから、そうあってはならない。

「是を植木にたとへ候へば、初め二葉かい割候節は、人の産れ立ち候と同じ事故、随分養育いたし、最早一二年も立ち、枝葉多く成り候節、添木いたし、直に成り候様に結び立て、そのうちに悪しき枝かきとり、年々右の通り、手入いたし候へば、成木の後、直なる能木に成り申し候。

人もその通り、四五歳よりは添木の人も付け置き候て・・・我が儘に育たぬ様にいたし候はば、後直によき人と成り申し候」

植木も人間もそのまま放っておかず、添木をしてちゃんと伸びていくようにしなければならない。

「第一、孝行と天命と、下へ慈悲をかけ、武家の事、幼少より申し聞かせ候へば、自然と身持よく成る物にて、君臣と申す事定りし事に候へ。君たるものは、臣君と心得申す事専一の由、我幼少の節、安部大蔵が毎度申し聞せ候」

親孝行とか天命に従うとか、あら

ゆる人に気を配るとか武家の在り方を、小さい頃から言い聞かせれば、自然と身につき、人の上に立つ指導者になれる。そういうことを自分も幼少のころ安部元真（一五一三～八七）から教えられた。

「何事によらず慈悲をかけ、贔屓偏頗（ひいきへんぱ）なく賞罰正しく、臣を君の元とこころえ候へばよく候、臣ありての大名なれは、召し仕者なくては、大名のせんはなく候、」

あらゆる人に慈悲をかけて、やさしい心で接し、依怙贔屓せずに賞罰もきちんとする。そうすれば臣下は、この君のためならばとよく仕えてくれるようになる。

「とかく幼少の者には、召し仕へ候者の申す事をよく聞けよく聞けと、常々御申し聞せなされ候事、専一候事に候。人はひとを鏡として身を正し候外はなく候」

幼少の者には、召仕える者の言うことをよく聞くように言い聞かせ、いろんな人に思いを寄せ、人の上に立てるような人格を身につけさせて欲しい。「人は人を鏡として身を正し候」ほかない。まさに人から学ぶ気持ちを大事にすべきだという。

「第一、我儘にては、親を恐れず、親に見かぎられ、第二、親にうとまれ、第三、朋友にうとまれ、第四、召し仕へ候者にうとまれ、第五、我が身順ひて委しく望は叶はず」

我が儘であれば、親さえ恐れなくなり、見放される。友達からも、召使いからもうとまれ、結果的に自分の望みはかなえられない。

「右五か条の通り、成り行き候へども、身をうらみ天道をうらみ、後には煩しく乱るゝより外はこれなく候。」「幼少より物事自由にならぬ事、よくよく心得度き事に候」

小さい頃から自由気侭にしておれば、結局身を滅ぼすことになる。幼少より物事は自由にならないことを、よく心得させてほしい。

これらの具体的な訓育の心得は、まさに家康自身の経験的な信条であり、それをお江に伝え孫教育に活かしてほしいと考えて、長い書簡を遺こしたのである。

このように懇切な孫教育のアドバイスは、一般に流布している「人の一生云々」の遺訓、特に**「不自由を常と思えば不足なし」、「堪忍は無事長久の基」**という文言につながっているように思われる。

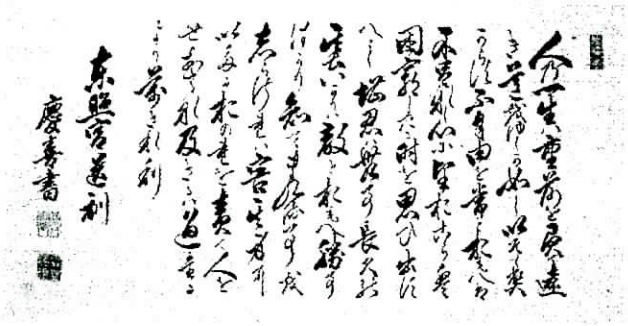
七　歴史伝承の真と実

家康の遺訓として流布するものは、おそらく家康の生き方・考え方から学んだ孫の光圀がまとめた「人のいましめ」を転用されたものであろう。その光圀も井上元就の聴取した「覚書」や家康自身から嫁お江に宛てた「御文」などを手に入れ参考にしたかもしれない。

およそ歴史の伝承には、事実そのものでなくても、真実を言い表している名言や逸話が少なくない。

それゆえ、家康の生き方・考え方に感銘して、その本質を簡単にまとめたものが、一般に流布している「東照宮遺訓」だと考えてよいと思われる。

なお、この「東照宮遺訓」を明治時代に徳川慶喜が書写したもの（左写真）が、茨城県立史料館に現存する。（これは三月十八日、大垣市で開かれた「汗青会公開セミナー」での講演要録（幹事桶本作成）に講師が加筆したものである。）



茨城県立歴史館『歴史館だより』１１１号（平成２７年）より

微風烈風　賢者は歴史に学び愚者は経験に学ぶと言う言葉があります。近頃インドでチャンドラボースの像が建てられたという。第二次大戦時、日本はインパール作戦で大敗したが、その時一諸に戦ったのが彼であり、それがインド独立のはじまりでした。イギリスから独立するために連合国側に立って日本と戦わざるを得なかったが、日本兵を死なせたくない思いで投降を呼びかけた。追い詰められても戦い続ける日本兵の返答からファイティングスピリットを学んだといいます。伝統的に中立を貫いてきた国がボウスの評価を変えています。ここでは日本軍への悪口はなく好意的です▲小学校では十歳になると二分の一成人式があるといいます。教える側は親への感謝を第一にあげているようですが、希望をかもす式典が児童を傷つけることになる例も多くあると識者は忠告しています。大人の人生が子供に及ぼす影響は計り知れないものがあります。このスパイラルという連鎖も人の歴史なのでしょうか▲歴史ブームだろうか、今年は家康だ。歴史は一言一句に裏付けがいります。現代の価値観で昔の髷と衣装をつけた歴史劇が多くなりました。彰考往来と娯楽と楽しみ方もそれぞれですが、それも又よしのゆとりを持ちたいものです。Y